

國學院大學學術情報リポジトリ

「スイス標準ドイツ語発音」の音韻的特徴と言語使用状況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): スイスの標準語, 標準ドイツ語, 発音, 音韻体系, 使用言語 キーワード (En): 作成者: 新倉, 真矢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000107

「スイスの標準ドイツ語発音」の 音韻的特徴と言語使用状況

新 倉 真 矢 子

キーワード

スイスの標準語 標準ドイツ語 発音 音韻体系 言語使用

要旨

スイス連邦憲法の定める属地主義によりスイスの21州がドイツ語を公用語とし、公的な場面で使われる「スイスの標準ドイツ語」と日常的に使われる「スイスドイツ語（方言）」が併存するダイグロシアを存続させている。「スイスの標準ドイツ語」は、ドイツやオーストリアの「標準ドイツ語」とともに「標準語変種」を構成しているが、3国間で発音などが若干異なる。本稿ではスイスとドイツの「標準ドイツ語発音」の音韻的特徴を精査し、「スイスの標準ドイツ語発音」の音韻体系や音節構造を分析し、スイスの言語使用状況との関連を探る。

「スイスの標準ドイツ語」は、主に話し言葉やアイデンティティー保持の機能を有する「スイスドイツ語（方言）」と異なり、公的文書や新聞など主として書き言葉に用いられる。このような使用環境により「スイスの標準ドイツ語発音」には文字情報が音声体系や音韻構造に反映され、弛緩母音の緊張母音への中和、有声阻害音 <b, d, g, s> の有声性の保持、鼻音が隣接する阻害音の調音点への非同化、3種の <e> 音の [e] への統一などの特徴を持つ。

また、「スイスの標準ドイツ語」は「聞こえ度」に差のある音節が連続し、ドイツ語の強勢拍リズムを崩す傾向にある。その他、音素数はドイツの「標準ドイツ語」と比べて簡略化していることから、「スイスの標準ドイツ語発音」は、生成と知覚の効率を優先させた

音韻構造・音韻体系を保つ働きがあることが推測される。「スイスの標準ドイツ語発音」は、ドイツの「標準語発音」との差別化を図る (Hove 2007) 目的とともに日常的に使用する「スイスドイツ語 (方言)」の影響が加えられたことにより、内容伝達を中心とした聞き取りやすさや発音のしやすさを重視した「スイスの標準ドイツ語」が形作られていることが考察される。

1. はじめに

スイス連邦が定める国語 (Landessprache) は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロロマンス語の4言語である⁽¹⁾。この4言語は建国時からのものではなく、1291年に Uri、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの3州 (カントン) が永久同盟を締結してスイスが誕生した際にはドイツ語が唯一の言語であった。1848年のスイス連邦憲法の制定によりフランス語とイタリア語が加わり、3言語が連邦の国語として明文化された。さらに1938年にレトロロマンス語が4番目の国語に加わった。レトロロマンス語がスイスの土地に根ざす少数派言語であることに配慮したものであったが、特にイタリアに対する国土防衛が理由であったとされる (高橋 2009)。このようにスイスの国語は、歴史的経緯からもその土地の人々の言語使用を尊重することを州 (カントン) や個人のレベルで保証し (第2章参照)、地域文化の維持に努めている。

スイスで使われるドイツ語には「スイスの標準ドイツ語 (Schweizer Hochdeutsch)」と「スイスドイツ語 (方言)」 (Schweizer Deutsch) がある。「スイスの標準ドイツ語」は、ドイツ語圏で使われている「標準ドイツ語」の一つに数えられ、他にドイツの「標準ドイツ語」とオーストリアの「標準ドイツ語」が含まれる。使用人口の多いこの3国の「標準ドイツ語」は、規範を担う機関があるために「中心地」 (Vollzentrum) の役割を果たす⁽²⁾。各国の「標準ドイツ語」は、互いに音声や語彙、統語構造が僅かに異なる (Ammon 1995)。従って「スイスの標準ドイツ語」とドイツやオーストリアの「標準ドイツ語」は、同じ「標準ドイツ語」ではあるものの「標準ドイツ語」の「変種」とみなされる。つまり「標準ドイツ語」には3種の「標準ドイツ語変種」⁽³⁾が存在する。各種の「標準ドイツ語変種」は歴史や伝統に依るものであり、文法や語彙などわずかな言語使用の差はあるものの、変種間の言語的価値は同等であるとする (Duden ²2018: 8)。

「標準ドイツ語変種」を「標準ドイツ語」に統一する動きは「正書法」に見られた。1901年の第2回正書法会議において Konrad Duden の「正書法辞典 (Orthographisches Wörterbuch)」が認定され、それ以降は Duden の正書法辞典に基づく正書法がドイツ語

圏で統一的に使用されるようになった⁽⁴⁾。しかしながらこのような正書法の動きとは異なり、ドイツ語の発音は3国で統一されるには至らなかった。唯一ドイツでは1922年にTheodor Siebsの「ドイツ語舞台発音」⁽⁵⁾がドイツ帝国全域にわたり拘束力を持つ「標準ドイツ語発音」に認定された。第二次世界大戦後に分断された旧西ドイツでは、「ドゥーデン発音辞典」が1962年に刊行され、ニュースなどのメディアの規範となった。旧東ドイツでは1964年に「ドイツ語発音辞典」が出版され、旧東独のドイツ語発音の規範となった⁽⁶⁾。このような旧東西ドイツでそれぞれの規範となった発音は、しかしながらスイスやオーストリアに影響を及ぼさなかった⁽⁷⁾。スイスでは、スイス人が方言を日常的に使用するため、統一的に「スイスの標準ドイツ語変種」の発音を規範化することが難しかったからとされる（Ammon 1995）。スイスにおいてはBoesch（1957）の発音の手引書や、その継承本であるBurri et al.（1995）が刊行されたものの、規範となることも広く認知されることにも至らなかった。その後2012年にDudenの「スイスの標準ドイツ語 Schweizer Hochdeutsch」が出版され、2018年の改訂版には「スイスの標準ドイツ語」3500語が掲載された上、文法や発音などの解説が充実し、推奨される標準ドイツ語が「スイスドイツ語同盟」⁽⁸⁾によりまとめられている（Duden²2018: 8）。

本稿は、「スイスの標準ドイツ語発音」とドイツの「標準ドイツ語発音」を比較し、「スイスの標準ドイツ語」の音韻体系、音節構造などにどのような特徴があるかを考察するものである。これまでに分節素・超分節素のレベルでスイスの「標準ドイツ語発音」をドイツの「標準語発音」と比較する研究はわずかながら行われていたものの、「スイスの標準ドイツ語発音」の音韻構造を体系的にとらえ、言語使用の観点から説明したものはほとんどない。本稿では「スイスの標準ドイツ語発音」の音韻特徴を捉えるとともにスイスの言語使用との関連で音韻的な解釈を行う。

2. 「スイスの標準ドイツ語」と「スイスドイツ語（方言）」

スイスの連邦憲法に4つの国語（Landessprache）が明文化されていることは冒頭で述べたが、同時に属地主義（Territorialitätsprinzip）を取り、各州（Kanton）に言語選択の決定権が与えられている（憲法第4条第2項）。各州は1～3言語を選択し、チューリッヒ、ルツェルンなどの17州ではドイツ語が唯一の公用語であり、ベルン、フリブール、ヴァレーの3州ではドイツ語とフランス語が併用され、グラウビュンデン州ではドイツ語、レトロマン語、イタリア語の3言語を公用語としている⁽⁹⁾。2020年のスイスにおける言語使用者の割合は、ドイツ語62%、フランス語23%、イタリア語8%、レトロ

マンス語 0.5%である⁽¹⁰⁾。また州の言語とは別に個人の言語使用の自由を認める俗人主義(Personalitätsprinzip)も保証する。このようにスイスは多言語・多文化を担う複言語主義の国であり(Rash 1998)、国、州、個人による言語の自由な選択が保証されている。

スイスのドイツ語圏では、「スイスの標準ドイツ語」⁽¹¹⁾(以下「スイス標準語」)と、「スイスドイツ語(方言)(Schweizerdeutsch)」が併用されている(Ammon 1995, Siebenhaar & Wyler 1998)。両言語は段階的・漸次的な使用ではなく、二者択一となるダイグロシア(Diglossie)を形成し、個人が時と場所によりどちらか一方を使う。その切り替えは瞬時であり、例えばスイス人同士でスイスドイツ語(方言)を話しているところに、方言が理解できない人が混じると「スイス標準語」に切り替えて話を続ける(Christen 2000)。このように集合体の中での言語使用の適切性をもとに使い分けられている。

「スイス標準語」は、新聞や雑誌、書籍や公的文書、書簡などの文章語に使われ、話し言葉においても学校や大学などの教育機関、教会、メディアや議会などの公的機関、電車やバスなどの公共交通機関等で使用され、スイスのドイツ語圏に共通することばとして定着している(Hove 2002: 119f.)

「スイスドイツ語(方言)」は話し言葉であり、書き言葉をもたないという特徴がある。「スイスドイツ語(方言)」は高地アレマン方言をもとにさらに下位区分⁽¹²⁾されたものであるため、「スイスドイツ語(方言)」を統一的に記述することは難しい。近年では口頭に近いメールやSMS、テキストメッセージ、さらに広告のキャッチコピーなどの文書に「スイスドイツ語(方言)」が使われている(Günther & Wyss 1996)。「スイスドイツ語(方言)」に新しい文字コードが生まれつつあるといえる。「スイス標準語」は、国際テレビやラジオ放送の60%(Siebenhaar & Wyler 1998)で使用されているが、ローカルテレビなどで「スイスドイツ語(方言)」が使われる状況が年々増えている。スイス以外のドイツ語使用地域との差別化や国家のアイデンティティーのシンボルとして認識されていることが理由に挙げられる(Christen 2000)。

スイスの言語の特徴は、ドイツやオーストリアのように「標準語」と「方言」をつなぐ役割を果たす「日常語」を持たないことにあり、異なった社会階層や出身地域の対人関係を区別せずに一律に「スイスドイツ語(方言)」を使用することが一般的である(Christen 2000)。家族や親しい同僚のみならず、授業において説明に困る場面では「スイスドイツ語(方言)」に切り替えられるなど、話者間の意思疎通を図ることばとして機能している。

以上のようにスイス人は、日常的な口頭コミュニケーションでは「スイスドイツ語(方言)」を使用し、公の場やマスメディア、教育機関、文章語では「スイス標準語」が使われる。ドイツ語圏のスイス人にとって「スイス標準語」は、学校で初めて本格的に学習する

ことばでもあり、授業で使用する言語である。そのため「スイス標準語」は、「外国語のような心理的に隔たりのあることば」(Ammon 1995: 51)⁽¹³⁾とされる。

3. 「スイス標準語」と「ドイツ標準語 (=ドイツの標準ドイツ語)」の音韻的特徴

この章では „Schweizerhochdeutsch“ (Duden (2018)), „Deutsche Aussprachewörterbuch“ (Krech et al. (2009)), Hove (2002, 2007, 2008, 2017) の文献を用いて「スイス標準語」と「ドイツ標準語」の音韻的特徴を探る。Duden (2018) には推奨される「スイス標準語」発音が記載されている。Krech et al. (2009) は「スイスドイツ語圏の標準語発音 („Standardaussprache in der deutschen Schweiz“ [Hove & Haas 記載])」の項目を設け、慣習的な「スイス標準語」発音を載せている。Hove (2007, 2017) は、「スイスドイツ語 (方言)」にも「ドイツ標準語」にも偏らない「スイス標準語発音」を説明する。Hove は、自身がスイス人であることもあり、その分析は最も「スイス標準語」の実態に即しているものと考えられる。以下では「ドイツ標準語」と比較しながら「スイス標準語」に特徴的な音素や音韻構造を分析する。

3. 1. 「スイス標準語」の母音

1) 母音の音長と音質

「ドイツ標準語」と同様に「スイス標準語」は「長母音・短母音」の音長と「緊張母音・弛緩母音」の音質を区別する (Duden 2018: 100)。音長と音質の組み合わせは「長母音・緊張母音」および「短母音・弛緩母音」である⁽¹⁴⁾。<i>であれば [i:] (長母音・緊張母音) と [ɪ] (短母音・弛緩母音) の2音を区別する。「スイス標準語」はこれに加え「短母音・緊張母音」([i] [y] [u] [o] [ø] [e]) の組み合わせも使用する (Krech et al. 2009: 262, Hove 2007: 1, Hove 2017: 7)。「スイス標準語」は従って、長母音・短母音ともに緊張母音が用いられる。

2) 無強勢シュワー音 [ə]

「ドイツ標準語」の語尾や接頭辞などの無強勢音節にシュワー音 [ə] が現れるが、「スイス標準語」ではシュワー音 [ə] はわずか17%、[ɛ] は26%しか使われず、主として [e] (68%) で代用される (Hove 2007: 7)。接頭辞 <be-, ge->⁽¹⁵⁾のシュワー音 [ə] も「ドイツ標準語」と同じ [bə] [gə] の他に「スイス標準語」では [be] [ge] のように [e] に置き換えられる (Krech et al. 2009: 267)。従って、無強勢シュワー音 [ə] は「短母音・

緊張母音」の [e] となるため、「スイス標準語」の文字 <e> は、長短緊張母音 [e(:)] とともにすべてが [e] に集約されつつあるといえる。

3) <a> 音

<a> は、「ドイツ標準語」では長母音・短母音とも弛緩母音 [a:] [a] を用いるが、「スイス標準語」では後舌母音 [ɒ] に置き換えられる (Ammon 1995: 68)。 $[\text{ɒ}]$ は緊張母音である。

このことから、「スイス標準語」の単母音は、長母音・短母音とともに緊張母音への偏重が示唆される⁽¹⁶⁾。

4) 二重母音

二重母音の最初の母音は、「ドイツ標準語」で弛緩母音 [a] であるが、「スイス標準語」では同じ弛緩母音の半広母音 [æ] となることがある (Krech et al. 2009: 263)。 $[\text{æ}]$ は「ドイツ標準語」の音韻体系に含まれない音である。二重母音のうち2つ目の半母音は両標準語で同じ弛緩母音 [ɪ, ʊ] を使う (Hove 2007: 2)⁽¹⁷⁾。「スイス標準語」の二重母音は、「ドイツ標準語」とは異なる弛緩母音が連続する ($[\text{æɪ}]$, $[\text{æʊ}]$, $[\text{ɔɪ}]$)。

以下の表1に「ドイツ語標準語」と「スイス標準語」の母音を比較した以上の点をまとめる：

表1 「ドイツ標準語」と「スイス標準語」の母音の相違

	「ドイツ標準語」	「スイス標準語」
長母音・緊張母音	$[\text{i:}]$, $[\text{e:}]$, $[\text{ɛ:}]$ $[\text{y:}]$, $[\text{ø:}]$, $[\text{u:}]$, $[\text{o:}]$	$[\text{i:}]$, $[\text{e:}]$, $[\text{y:}]$, $[\text{ø:}]$, $[\text{u:}]$, $[\text{o:}]$, $[\text{ɒ:}]$
短母音・弛緩母音	$[\text{ɪ}]$ $[\text{ɛ}]$ $[\text{ʏ}]$ $[\text{ø}]$ $[\text{ɔ}]$ $[\text{ɔ}]$ $[\text{a}]$	($[\text{ɪ}]$ $[\text{ʏ}]$ $[\text{ø}]$ $[\text{ɔ}]$ $[\text{ɔ}]$ $[\text{a}]$)
短母音・緊張母音		$[\text{i}]$, $[\text{e}]$, $[\text{ʏ}]$, $[\text{ø}]$, $[\text{u}]$, $[\text{o}]$, $[\text{ɒ}]$
弱母音 <e>	$[\text{ə}]$	$[\text{e}]$ (緊張母音)
二重母音	$[\text{aɪ}]$ $[\text{aʊ}]$ $[\text{ɔʏ}]$	$[\text{æɪ}]$ $[\text{æʊ}]$ $[\text{ɔɪ}]$

「スイス標準語」の単母音は長・短両母音とも緊張母音が使われるため、「ドイツ標準語」に比べると緊張性が高められた発音といえる。弛緩母音は母音が重なる二重母音に使われるが、[a] の代わりに $[\text{æ}]$ が用いられ、2番目の狭母音とともに両音とも開口度が低い音が代用される。

3. 2. 「スイス標準語」の子音

「スイス標準語」の子音は「ドイツ標準語」と比べて調音点や調音法が異なることを特徴とする。

1) 有声阻害音⁽¹⁸⁾の無声化

「ドイツ標準語」の有声阻害音 [b] [d] [g] [z] は、語末・音節末で無声音 [p] [t] [k] [s] に中和する。一方「スイス標準語」の有声阻害音 [b], [d], [g], [z] は、同位置で無声化した有声音 [p̥] [t̥] [k̥] [s̥] が用いられる (Krech et al. 2009: 265, Hove 2017: 4)。このことから「ドイツ標準語」の Rad と Rat は、語末の <d> が [t] の無声音になるため、どちらも [rat] と同音であるが、「スイス標準語」では Rad [raːp̥] と Rat [rat] のように区別される。

また、「スイス標準語」の [b], [d], [g], [z] は、語末・音節末のみならず語頭、語中など全ての音節位置で無声化した有声音 [p̥], [t̥], [k̥], [s̥] に変わることがある (Krech et al. 2009: 265, Hove 2007: 9)。<s> は、すべての音節位置において [s̥] とともに無声音の [s] も用いられる (Krech et al. 2009: 265)。「ドイツ標準語」の有声音と無声音の対立は、「スイス標準語」では無声化した有声音に中和される傾向にあるといえる。<d><g><s>の文字情報が発音に反映されていると推測される。

2) 無声軟口蓋破裂音・摩擦音

・<k>の気息化・破擦音化

「ドイツ標準語」では語頭の <k> は気息音を伴う [k^h] であるが、語中では気息化しない。「スイス標準語」の <k> は、語頭のみならず語中においても気息音 [k^h] や軟口蓋破擦音 [kx] を用いる (Hove 2017: 4)。気息音 [k^h] は [k] より呼気圧が高く、破擦音 [kx] の [x] は [k] と同じ調音点の無声軟口蓋摩擦音であり、いずれも [k] の気流の強さが反映されている。

・<ig>の破裂音化

語末・音節末の <ig> の <g> は、「ドイツ標準語」では無声硬口蓋摩擦音 [ç] になるが、「スイス標準語」の <g> は、無声軟口蓋破裂音 [k] または無声音化した有声軟口蓋破裂音 [g̥] である (Duden ²2018: 103, Hove 2007: 1, Hove 2017: 8)。摩擦音 [ç] ⁽¹⁹⁾ が破裂音 [k], [g̥] へと調音法を変えることは、聞こえ度 (4.3. 参照) が高められたことにつながる。

・<ch>の軟口蓋音化

「ドイツ標準語」の <ch> は、後舌母音直後に無声軟口蓋摩擦音 [x] となり、それ以外の母音や子音の後、語頭では無声硬口蓋摩擦音 [ç] となる条件異音である。「スイス標準語」では同様に用いられるが (Duden ²2018: 102)、特に正確に発音する意図があれば [ç] も使用するものの、[x] が統一的に使用にされる (Krech et al. 2009: 266, Sieber 2010: 378)。

以上のように「スイス標準語」の[k]は気息化・破擦音化し、無声軟口蓋摩擦音[ç]が調音点および調音法を無声硬口蓋破裂音[k], [g]および摩擦音[x]に変えるため、硬口蓋音への偏重傾向がみられる。

3) <r> の発音

「スイス標準語」の<r>は、歯茎顫動音[r]と口蓋垂顫動音[R]の自由変異であるが(Duden²2018: 102)、歯茎顫動音[r]が優先的に用いられる(Krech et al. 2018: 266, Hove 2017: 7-8, Ammon 1991: 71)。「ドイツ標準語」で使われる口蓋垂摩擦音[ʁ]は語末・音節末以外では用いられない(Duden²2018:102)。摩擦音([ʁ])と顫動音([R], [r])を比較した場合、顫動音([R], [r])の方の子音性が高い(4.3.聞こえ度参照)。

「スイス標準語」の語末・音節末の<-r, -er>は、「ドイツ標準語」のように母音化された[ɐ], [e]を使わず、代わりに舌尖歯茎顫動音[r](Duden²2018: 102, Krech et al. 2018: 266, Hove 2017: 7)、もしくは口蓋垂摩擦音[ʁ]が使われる:[fateʁ] [me:ʁ](Krech et al. 2009: 266, Hove 2007: 2)。また弱音節に現れる無強勢の[e]音が「スイス標準語」では弱音節化されずに文字通りの<-er, -r>音を保つ。

4) 母音間の子音重複

「ドイツ標準語」の子音重複⁽²⁰⁾は、直前の母音が短音であることを示し、両音節性の役割を持つが(<alle> [alə] など)、「スイス標準語」の子音重複は、文字の数だけ子音の持続時間を延ばす長子音である: alle [a:le], Schritte [ʃrit:e], Gasse [gas:e], Hammer [ham:er](Krech et al. 2009: 265, Hove 2017: 4)。この場合の長子音は、音節間の区切りを示す役割も兼ねる([alle] など)。

5) 語頭・音節頭の無声声門閉鎖音 [ʔ]

「ドイツ標準語」では語頭・音節頭の母音の直前に無声声門閉鎖音[ʔ]が入り、語や音節を区切る働きをするが、「スイス標準語」では[ʔ]はほとんど使われない(Krech 2018: 262, Hove 2017: 4)。2語間では最初の語の語末子音が次の語の母音とつながり、普遍的な音節構造になることがある。<heißen|acht>と<heiße|Nacht>は同じ発音になる(Krech et al. 2009: 262)。

6) 鼻音の調音点同化

「ドイツ標準語」では鼻音が隣接する阻害音の調音点に同化⁽²¹⁾するが、「スイス標準語」では同化されない(Duden²2018: 102, 103)。<Unfall>は、唇歯摩擦音[f]の調音点[n]を両唇音[m]に同化させて[ʊmfal]になるが、「スイス標準語」では文字通り[ʊnfal]と発音する。

以下に「ドイツ標準語」と「スイス標準語」を比較した結果をまとめる⁽²²⁾：

表2 「ドイツ標準語」と「スイス標準語」の子音の相違

	「ドイツ標準語」	「スイス標準語」(追加許容)
語頭音や語中音の , <d>, <g>, <s>	[b] [d] [g] [z]	[b̥] [d̥] [g̥] [z̥]
語末・音節末の , <d>, <g>, <s>	[p] [t] [k] [s]	[b̥] [d̥] [g̥] [z̥]
語頭・語中の <k>	語頭 [k ^(h)] 語中 [k]	[k ^h] [kx]
<ig>	[ɪç]	[ɪɡ] [ɪk]
<ch>	後舌母音後に [x]、 それ以外は [ç]	[x], [k ^h]
母音間の重子音	短子音 [t] [s] [m] [x] ...	長子音 [t:] [s:] [m:] [x:] ...
<r>	[r/ʀ/ʁ]	[r]、語末・音節末で [ʀ/ʁ]
<r>：語末・音節末の長母音の 直後 <er>, と <er>, <ver>	[ɐ]	[r/ʀ/ʁ]
母音直前の [ʔ]	[ʔeine ʔAffe]	[eine Affe]

4. 「スイス標準語」の音声体系・音韻構造の特徴

第3章で文献上明らかになった「スイス標準語」に現れる音声体系・音韻構造の特徴を以下の3点にまとめる。

4. 1. 分節音（母音と子音）

➤母音の緊張性 [± tense]⁽²³⁾

・「スイス標準語」の単母音は、緊張母音 ([+tense]) に集約される傾向にある。「スイス標準語」は長母音とともに短母音も緊張母音と組み合わせたり、[i(:)], [e(:)], [y(:)], [ø(:)], [u(:)], [o(:)], [ɐ(:)] が用いられるため、長母音・短母音とも緊張性の高さ ([+tense]) を特徴とする。

・[± tense]/[± front]：「ドイツ標準語」の <e> は、3つの <e> 音 ([e:], [ɛ], [ə]) を区別するが、「スイス標準語」では3つの <e> 音のうち [-tense]/[+front] の [ɛ] と [-tense]/[-front] の [ə] が [+tense] [+front] の [e] に集約される。

➤子音の有声性 [± voice]

有声阻害音 [b, d, g, z] の有声性 [+voice] は、音節中の位置に関係なくすべてが部分的に無声性 [-voice] になり、無声化した有声阻害音 [b̥] [d̥] [g̥] [z̥] が用いられる。

<s> は [z̥] とともに無声音 [s] になるため、有声音と無声音の対立は部分的にも無声性 [-voice] に中和される。

➤音素数の減少

弛緩母音 [ɪ], [ɛ], [ʏ], [ø], [ʊ], [ɔ], [a] およびシュワー音 [ə], [e]、子音の軟口蓋無声摩擦音 [ç] の欠如は、「スイス標準語」の音韻数の減少を意味し、同時に音韻体系の縮小につながる現象である。

4. 2. 強勢拍リズムの変化

・「ドイツ標準語」の無強勢音節は弱化し、弱音節の無強勢語尾 <en/el/em> や <-r, -er> は、シュワー音 [ə] および [e] に変わる。「スイス標準語」の <en/el/em> は、シュワー音 [ə] にならず、核音⁽²⁴⁾としての機能が保たれる。<-r, -er> も [e] に弱化せず⁽²⁵⁾、[e] [r, R] の両音が保たれる。従って「スイス標準語」ではシュワー音 [ə], [e] に欠ける音韻体系を持つと同時に、強音節が連続することで強勢拍リズムから逸脱した音節構造を持つことに変化する。

・「スイス標準語」の音素を「聞こえ度 (Sonorität)」⁽²⁶⁾から強勢拍リズムを分析する。母音や子音などの分節音は、固有の大きさや強さの特性を持ち、「聞こえ度」の尺度で表される (Sievers 1901, Jespersen 1904, Selkirk 1984)。音節は、母音など「聞こえ度」の高い分節音を中心にその前後に「聞こえ度」の低い分節音を結合させた形を形成する (Selkirk 1984, Blevins 1995, Hall 2007)。母音は子音に比べて開口度が高く⁽²⁷⁾、母音は、緊張母音と弛緩母音の2つの音質のうち、弛緩母音は緊張母音より中央中舌母音に近づくため、「聞こえ度」も低い。強勢のない中舌母音 [ə] は母音の中で最も「聞こえ度」が低い (Kenstowicz 1994)。子音は、母音より「聞こえ度」が低く、中でも障害音が最も「聞こえ度」が低い。障害音のうち破裂音が低く、無声音の方が有声音より「聞こえ度」が低い。以下の表3は、「聞こえ度」の尺度を表したものである。左端に「聞こえ度」が低く、右方向に向かって「聞こえ度」の高い音素が順に配列されている。

表3 「聞こえ度」の尺度

← 低い	高い →
破裂音(無声破裂音<有聲破裂音)<摩擦音(無声摩擦音<有聲摩擦音)<鼻音<流音(l,r,R)<母音(弛緩母音<緊張母音)	

「スイス標準語」では主として緊張母音が用いられるため、音節の核音は「聞こえ度」が最も高い。「ドイツ標準語」のシュワー音 [ə] は、「スイス標準語」で緊張母音 [e] に

変わるため、核音としての「聞こえ度」の大きさは接頭辞や接尾辞でも保たれる。阻害音については、有声阻害音 [b, d, g, z] は無声化するため、「聞こえ度」を低くしている。重子音 (tt, ff など) は長子音になり、子音の長さが保たれているため、「聞こえ度」の低さを持続させている。このことにより音節の区切りが明確になる。結果として「聞こえ度」に高低差のある、明瞭度の高い音節構造が生じる。

以下の図 1 では縦軸に明瞭度の尺度を取り、横軸に <bitten> の音素が配置されている。縦の値が高くなれば「聞こえ度」が高く、低ければ「聞こえ度」が低い。図 1 の bitten [bɪtən] は、「ドイツ標準語」発音では点線で表わされているように <i> が弛緩音 [ɪ]、<e> は [ə] に弱音化されている。一方「スイス標準語」では <i> と <e> が [i] と [e] の緊張母音であるため「聞こえ度」がほぼ同程度に高い。「スイス標準語」の子音は、語頭の [b] が無声化し、語中の両音節的子音 <tt> が長子音となる。これにより強音節も弱音節も類似した山形を形成し、音節間の子音を 2 文字分延ばすことにより、音節の区切りが明確になり、「聞こえ度」に高低差のある、めりはりのきいた音節となる。「スイス標準語」は、音節構造上の理想形として音声伝達を行う上では聞き取りやすい構造であるといえよう。

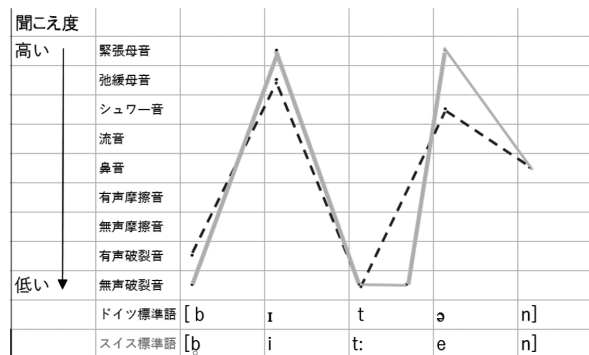


図 1 bitten の「聞こえ度」

実線：「スイス標準語」、点線：「ドイツ標準語」

4. 3. 普遍的な音節構造⁽²⁸⁾

「スイス標準語」では、「ドイツ標準語」のように母音の始まりに声門閉鎖音を伴わない。語間では語末の尾子音を次の語の頭子音とする開音節の構造に変える。開音節は普遍的な構造であり、「スイス標準語」では CV (子音・母音) 構造になるように語間で調整し、子音を次の母音に繋げる：<guten Abend> は、<gu.ten.A.bend> ではなく、<guten> の <n> を次の語 <Abend> の頭子音とする <gu.te.nA.bend>。

5. まとめ

スイスのドイツ語圏では「スイス標準語」と「スイスドイツ語(方言)」を使い分けるダイグロシアを用い、社会生活をする上でも日常的な場面でも個人間の使用範囲においては各地域の「スイスドイツ語(方言)」を使う。「スイスドイツ語(方言)」は、スイス人にとって自分たちのアイデンティティーを表す言語手段の一つである一方で、「スイス標準語」が使われる職場や教育機関などでは意思疎通を図るための共通語として定着している。スイス人にとって「スイス標準語」は、内容伝達のために使われる言語としての共通の認識の上にあるといえる。

とりわけ第二次世界大戦後のスイスでは「ドイツ国民の一人とみなされないために」(Hove 2007: 10)「ドイツ標準語」から可能な限り逸脱しつつ「スイスドイツ語(方言)」の特徴を最小限に取り入れた「スイス標準語」を受け入れた。

以上のことを踏まえ、言語使用状況から「スイス標準語」の特徴をまとめる。

➤内容伝達に適した音韻構造と分節音

「スイス標準語」は、「ドイツ標準語」に比べて聞き取りやすく発音しやすい音素と音韻構造が用いられている。音節は、核音を緊張母音にすることで聞こえ度を高め、有声阻害音の無声化や重子音化により子音の「聞こえ度」を低下させている。このことにより、「聞こえ度」に高低差のある理想的な音節構造に近づくものとなる。強勢のある音節のみならず強勢のない音節も同様に「聞こえ度」の高い母音を用いている。その結果、強勢拍リズムを崩す音節構造に変化し、伝達性が高められている。

➤文字情報を残した発音

「スイス標準語」は、主に書き言葉として使用されることから文字通りの発音への偏向がみられる。<e>を文字通り[e]と発音し、緊張母音・弛緩母音の区別をせずに緊張母音に統一し、接頭辞・接尾辞を弱音化させずに[e]とすることや、有声阻害音<b, d, g, s>を無声化しながら文字情報を残していること、鼻音を同化させないことが文字情報を反映させた結果である。

➤外国語としての学びやすさ

「スイス標準語」の母音・子音の数は、「ドイツ標準語」に比べて少なく、音節構造は普遍的なものに置き換わる傾向にある。小学校の「スイス標準語」の授業は、就学後初めて学習する外国語であり、十分に使いこなす機会を逸したものである(Hove 2007: 5)。外国語としての「スイス標準語」は、学びやすさを重視し、同時に教師や生徒が発音しやすく聞き取りやすいことを優先させたものといえよう。このことは、スイス人が「スイス

標準語」を自国語ながら外国語と捉えていることが根底にあるものといえる。

以上のように「スイス標準語」の発音を文献上分析した結果を考察した。これまでスイスは独自の公式な発音辞典を出版していない。「スイス標準語」の日常的使用がかなり限定的であり、「スイス標準語」に対する人々の心理的な隔たりがあることに依拠することが考えられる。1996年にドイツ、オーストリア、リヒテンシュタインとともにスイスもドイツ語の「新正書法」制定に関する協定が結ばれ、2006年の改定を経て「書き言葉」がドイツ語圏で統一されたが、いまだにスイスではドイツ語の話し言葉を統一する動きはなく、Hoveが積極的に論文を発信している以外はドイツで出版されたKrech et al.の発音辞典と、発音を「推奨」のレベルでとらえているDuden発行のものしかない。発音は、意思内容を伝達する手段であり、「スイス標準語」を国の国語及び公用語として認め、今後も公的な使用を続けるためには、文字情報と音韻解読が互いに補完する関係にある「スイス標準語」の統一的な提示が求められる。

注

- (1) スイス連邦憲法では、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロロマンス語を国語（Landessprache）とし、ドイツ語、フランス語、イタリア語を公用語（Amtssprache）とするが、レトロロマンス語話者との交流において連邦の公用語としている。
- (2) その他のドイツ語圏の国の「標準ドイツ語」は、半中心地（Halbzentrum）もしくは四分の一中心地（Viertelzentrum）の役割を果たす。
- (3) 「標準ドイツ語変種」は、ドイツ、オーストリア、スイスの3か国の「標準ドイツ語」を指し、その国で規範となる語彙や文法、正書法、発音などが明文化され、その成文規範を担う機関がある。「スイスの標準ドイツ語」の規範は「スイスドイツ語協会」が担い、公的文書の正書法は、連邦評議会事務局（Bundeskanzlei）が手引書（Leitfaden zur deutschen Rechtsreibung）を発行している。
- (4) 1996年7月1日にドイツ語「新正書法」制定に関する協定がドイツ・オーストリア・スイスで結ばれた。
- (5) 1898年にDeutsche Bühnenaussprache, Verlag von Albert Ahnより刊行。
- (6) 1982年に「ドイツ語発音大辞典」として全面改訂、最新版は2010年。
- (7) オーストリアでは2007年にオーストリア発音辞典（Österreichisches Aussprachewörterbuch）が刊行された。
- (8) Der Schweizerische Verein für die deutsche Sprache (SVDS)。
- (9) フランス語を公用語としているのはジュネーブ、ジュラ、ヌーシャテル、ヴォーの4州、イタリア

語はティチーノ州とグラウビュンデン州南部の4つの谷地。

- (10) Bundesamt für Statistik <https://www.bfs.admin.ch/>
- (11) Schriftdeutsch, Hochdeutsch, Schweizerhochdeutsch と呼ばれる。
- (12) スイスドイツ語は、アレマン方言 (Alemannisch) に属し、低地アレマン方言 (Niederalemannisch)、南アレマン方言に属する高地アレマン方言 (Hochalemannisch) と最高地アレマン方言 (Höchstalemannisch) に下位区分される (Sonderegger 1985, Rash 1998)。
- (13) スイス人がどのことばを使うかは慣習によるところが大きい。「スイスドイツ語 (方言)」が使われる場面でも重要性を強調するときや引用、会話を誘導する際には「スイス標準語」に切り替わる (Ammon 1995: 51)。
- (14) 「ドイツ標準語」の外來語では緊張母音・短母音の組み合わせもある。
- (15) < > は文字を表す。
- (16) 「ドイツ標準語」と「スイス標準語」の長母音と短母音は、異なる位置に現れる語がある：①ドイツ標準語で短母音だが「スイス標準語」で長母音：dachte [da(:)xtə], Kino: [ki(:)no] ②「ドイツ標準語」で長母音だが「スイス標準語」で短母音：nochmals [nɔxma:ls] (Duden 2018: 100)。
- (17) そのほかにも弛緩母音 [ɛ,ɔ] や緊張母音 [e,o] を使うこともある (Krech et al. 2009: 263)。
- (18) 阻害音とは、破裂音と摩擦音である。
- (19) ベルン方言では硬口蓋摩擦音 [ç] は体系にない (Baumgartner 1922)。
- (20) 子音が重複し、前後の音節に係る両音節的子音 [l], [t], [s], [m] を指す。
- (21) 「同化」とは、近隣の音の影響を受けてその音と調音点または調音法が同じもしくは類似する音に変わる現象。
- (22) Duden をもとに改定。
- (23) 弁別素性のうち「緊張性」が [± tense] で表される (Hall, T. A. 2007, Gussenhoven, C. & Jacobs, H. 2005)。
- (24) 音節構造の中で中心的な役割をする。共鳴音のうち母音が担うことが多いが、他に [m], [n], [ŋ], [l] も担う。
- (25) 語末・音節末の接尾辞 <-er> においても母音化した [ɐ] に語尾の縮約が起こらないのは、アレマン方言の現れとされる。
- (26) 「聞こえ度」とは、知覚時における音の大きさや際立ちから判断される音の音響的な強さのことである (Blevins 1995)。
- (27) 母音は呼気の遮断が少ないため「聞こえ度」が高いとされる。子音の中では流音 ([r] や [l]) の「聞こえ度」が高く、鼻音、阻害音の順に低くなる (Hall 2007)。
- (28) Hall (2000) 参照。

参考文献

- Ammon, U. (1995): *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der deutschen Varietäten*. de Gruyter.
- Baumgartner, H. (1922): *Die Mundartende Berner Seelandes*. Huber & Co.
- Blevins J. (1995): The Syllable in Phonological Theory. In: Goldsmith, J. (ed.): *Handbook of phonological theory*. Blackwell, 206-244.
- Boesch, B. (1957): *Die Aussprache des Hochdeutsch in der Schweiz, Eine Wegleitung*. Schweizer Spiegel Verlag.
- Burri, R. M., Geiger, W., Schilling R. & Slembek, E. (1995): *Deutsch sprechen am Radio*. Schweizer Radio DRS.
- Baur, A. (1983): *Was ist eigentlich Schweizerdeutsch?* Gemsberg.
- Christen, H. (2000): Standardsprachliche Varianten als stilistische Dialektvarianten? In: Buhofer, A. H. (Hg.): *Vom Umgang mit sprachlicher Variation. Soziolinguistik, Dialektologie, Methoden und Wissenschaftsgeschichte*. A. Francke Verlag, 245-260.
- Duden-Verlag (²2018): *Schweizerhochdeutsch*. Wyss, J. (Hg.): Schweizerischer Verein für die deutsche Sprache.
- Dürscheid, Ch. & Businger, M. (2006): *Schweizer Standarddeutsch: Beiträge zur Varietätenlinguistik*. Narr Francke Attempto.
- Günther, U. & Wyss, E. L. (1996): E-Mail-Briefe – eine neue Textsorte zwischen Mündlichkeit und Schriftlichkeit. In: Hess-Lüttich, E. W., Holly, W., Püschel, U. (Hg.): *Textstrukturen im Medienwandel*. Forum angewandte Linguistik 29, 61-86.
- Gussenhoven, C. & Jacobs, H. (2005): *Understanding Phonology*. Hodder Arnold.
- Hall, T. A. (2007): Segmental features. In Lacy, P(ed.): *Handbook of Phonology*, Cambridge University Press, 311-334.
- Hove, I. (2002): *Die Aussprache der Standardsprache in der deutschen Schweiz*. de Gruyter.
- Hove, I. (2007) *Schweizer Hochdeutsch. Die Aussprache des Deutschen in der Schweiz*: (Vortrag) Jahrestagung des Schweizerischen Vereins für die deutsche Sprache und der Gesellschaft für deutsche Sprache, Luzern, 22. Juni 2007. Microsoft Word - Hove_SchweizerHochdeutsch.doc (rero.ch) [2021 年 3 月 20 日参照].
- Hove, I. (2008): Zur Unterscheidung der Schweizerdeutschen und (schweizerischen) Standardsprache. University of Zurich. Zurich Open Repository and Archive Year 2008. In: Helen Christen/ Evelyn Ziegler (Hg.): *Sprechen, Schreiben, Hören. Zur Produktion und Perzeption von Dialekt und*

- Standardsprache zu Beginn des 21. Jahrhunderts*. Wien 2008, 63-81.
- Hove, I. (2017): *Konfrontiert mit Schweizerdeutsch, Schweizerhochdeutsch und bundesdeutschem Hochdeutsch*. Zurich Open Repository and Archive. University of Zurich.
- Jespersen, O. (1904): *Lehrbuch der Phonetik*. Teubner.
- Kenstowicz, M. (1994): *Phonology in generative grammar*. Blackwell Textbooks in Linguistics: Wiley-Blackwell.
- Krech et al., E.-M. et al. (2009): *Deutsches Aussprachewörterbuch*. Walter de Gruyter.
- Meyer, K. (2006): *Schweizer Wörterbuch – So sagen wir in der Schweiz*. Frauenfeld: Huber.
- Muhr, R. (2007): *Österreichisches Aussprachewörterbuch*. Peter Lang Verlag.
- Siebenhaar, B. & Wyler, A. (1997): *Dialekt und Hochsprache in der deutschsprachigen Schweiz*. Pro Helvetia.
- Rash, F. (1998): The German Language in Switzerland. Multilingualism, Diglossia and Variation. *Australian Review of Applied Linguistics* Vol. 22:1. John Benjamins Publishing company, 129-132.
- Selkirk, E. O. (1984): On the Major Class Features and Syllable Theory. In: M. Aronoff & R. Oehrle (eds): *Language Sound Structure: Studies in Phonology Dedicated to Morris Halle by his Teacher and Students*. Cambridge, MA: MIT press, 107-113.
- Siebenhaar, B. & Wyler, A. (1998): *Dialekt und Hochsprache in der deutschsprachigen Schweiz*. Pro Helvetica. Schweizer Kulturstiftung.
- Sieber, P. (2010): Deutsch in der Schweiz: Standard, regionale und dialektale Variation. In: Krumm, H.J., Fandrych, C., Hufeisen, B. & Riemer, C. (Hrsg.): *Deutsch als Fremd- und Zweitsprache. Ein internationales Handbuch* (HSK 35.1). de Gruyter, 372-385.
- Sievers, E. (1901 [1876]): *Grundzüge der Phonetik, zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen*. Breitkopf & Härtel.
- Sonderegger, S. (1985): Die Entwicklung des Verhältnisses von Standardsprache und Mundarten in der deutschen Schweiz. In: Besch, W., Reichmann, O., Sonderegger, S. (Hrsg.): *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. (Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft 2.2). de Gruyter, 1873-1939.
- Bundesamt für Statistik <https://www.bfs.admin.ch/> (2021年6月1日参照).
- 高橋秀彰 (2009): 「スイス連邦の公用語と国語—史的背景と憲法上の規定—」 外国語学部紀要創刊号、27-40。